

公共図書館における「読み聞かせ」を担うボランティアの意識

水谷亜由美・中村哲也・濱千代いづみ・藤田万喜子

Awareness of Volunteers Responsible for "Yomikikase" in Public Libraries

**Ayumi MIZUTANI・Tetsuya NAKAMURA・Izumi HAMACHIYO・
Makiko FUJITA**

Abstract

The purpose of this paper is to organize and analyze the awareness of volunteers involved in "Yomikikase". We interviewed volunteers from four public libraries in Gifu about the significance and subject of "Yomikikase", etc. It revealed that volunteers are enjoying the world of picture books with children as readers and aiming for self-actualization. In contrast to the library staff who consider "Yomikikase" to be one of the educational and child-rearing support activities as a local official, volunteers face the children they're with and strive to make the time for reading picture books more fulfilling each time.

Key words

yomikikase, public libraries, volunteers, self-actualization

I. はじめに

本稿の目的は、「読み聞かせ」に携わるボランティアに対するインタビュー調査をもとに、ボランティアの意識について整理分類し、図書館の職員の意識との共通点と相違点を明らかにすることである。

子どもにとって読書活動とは、「言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの¹⁾」といわれている。なかでも、乳幼児期は絵本や物語を読んでもらい、興味を示すようになることが読書習慣の形成に結びつくと考えられており²⁾、家庭、幼稚園・保育所・こども園、地域の図書館で積極的に「読み聞かせ」が取り入れられている。

図書館での読み聞かせについて、水谷・中村・濱千代・藤田は、参加する保護者の実態³⁾と主催する職員の意識⁴⁾を調査し、次のような結果を報告した。

まず、保護者の実態として、参加のきっかけは「図書館の発信する情報」や「ブックスタート」であり、「子どもが絵本を好きになること」や「子どもと保護者、保護者同士の交流」、「子どもの言葉の育ち」を期待して参加している。また、図書館の読み聞かせに参加する人は、家庭でも積極的に読み聞かせを実践しており、利用する絵本は自ら手にとって選んでいることも見えてきた。図書館ごとに保護者の参加理由や家庭への取り入れ方には差が見られ、図書館の理念や読み手の願い

と保護者の意識の関連が捉えられた。

次に、図書館の職員の意識調査においては、子どもの言葉の育ちや読書推進、子育て支援を「読み聞かせ」の意義として認識していることが明らかになった。ICT化や孤立しやすい子育て環境の変化を捉え、親子で穏やかな雰囲気に参加できるよう環境づくりを行ったり、子どもが絵本に関心が持てるようわらべ歌やパネルシアターを取り入れたりする等、内容を工夫していることも見えてきた。活動の課題としては、活動を保護者に広く周知することや多様な絵本と出会う場作りなどが挙げられていた。

今回注目したいのは、図書館の職員の調査において、ボランティアとの連携の難しさが指摘されていた点である。図書館での読み聞かせには、地域のボランティアが読み手として活躍していることが多く、活動の充実のためにボランティアは大切な存在といえる。宮澤⁵⁾の学校での読み聞かせに関する調査では、ボランティアは、子どもとの交流と即時のフィードバックに喜びを感じており、自己の「楽しさ」に意義を見いだしていることが示されていた。図書館での読み聞かせにおいても、ボランティアは職員とは異なる立場から「読み聞かせ」の意義を捉え、活動していると推察される。そこで本稿では、読み手となっているボランティアのインタビュー調査を通し、ボランティアが捉えている「読み聞かせ」の意義や課題について整理分析する。その上で、ボランティアと職員の意識を比較し、子どもの言葉の育ちと図書館における「読み聞かせ」の充実について考察する一助としたい。

II. 方法

1. 調査及び分析方法

調査は、2019年9月～2020年2月に、子どもの読書活動を推進し、ブックスタートや読み聞かせ活動に積極的な取り組みを行っている本学近郊の岐阜県立図書館（以下「岐阜県」と表記）、大垣市立図書館（以下「大垣市」と表記）、各務原市立中央図書館（以下「各務原市」と表記）、羽島市立図書館（以下「羽島市」と表記）で行った。各図書館で読み聞かせ活動に携わる職員とボランティアに口頭及び書面にて、予め設定した同一の質問（活動の概要、「読み聞かせ」の準備と運営、「読み聞かせ」の意義と課題）をし、回答を得た⁶⁾。なお、本稿で扱う「読み聞かせ」は、絵本の読み聞かせに限らず、紙芝居やエプロンシアター、パネルシアター、素話（語り・ストーリーテリング）などのおはなし、わらべ歌・子守り歌、手遊び・身体遊びなどの活動を含む。

実施にあたり、岐阜聖徳学園大学研究倫理審査委員会における承認を得ている（承認番号：2019-02）。図書館の館長と読み聞かせの担当者、ボランティアに文書と口頭で説明し、同意を得た上で実施した。

本稿では、ボランティアの回答をKJ法を用いて分析した。得られた回答のラベル数は、①「読み聞かせ」で心掛けていることが50件、②読み聞かせ活動の意義が41件、③読み手が捉える参加者の変化とそれに伴う活動の変化が36件、④今後の課題が38件であった。各項目について考察した結果を報告する。各項目の最後には、職員の回答⁷⁾との比較を行う。なお、書面による回答の引用は、ボランティアの表現を尊重して鍵括弧をつけてそのまま表記した。

2. 調査協力者の概要

本調査では、「読み聞かせ」に携わるボランティア団体と個人ボランティア22組を対象とした。内訳は、「岐阜県」が10組、「大垣市」が9組、「各務原市」が2組、「羽島市」が1組である。

Ⅲ. 結果と考察

1. 「読み聞かせ」で心掛けていること

「読み聞かせを行うにあたって、心掛けていることはありますか」という質問に対して、各図書館のボランティアから回答を得た。回答内容に即して、(1)「読み聞かせ」の実践にあたって、(2)「読み聞かせ」の環境づくり、(3)日頃の心掛けの3つの大項目に整理し、分析する。最後に(4)職員の回答との比較を行う。

(1)「読み聞かせ」の実践にあたって

①「読み聞かせ」の事前準備

「読み聞かせ」の事前準備に関わる回答が多数あった。それらを内容に即して[選書]、[事前の練習]、[プログラム]という小項目に分類する。

i) [選書]

「読み聞かせ」に使用する本の選び方に関わる回答が10件あった。「対象者に合わせた絵本」を選ぶことを重視し、「色々な年齢に合わせて対応できるよう、何冊か準備して」いる。その上で、参加者の「年齢層を見てから、もう一度選び直す」という柔軟な対応もしている。近年、参加者の低年齢化が進行しており、その対応として「分かりやすく絵もきれいな本」を選ぶようにしている。異年齢の子どもに対応した選書を行うとともに、「季節感に合う本を選ぶようにしている」。一人の読み手として「本に目を通して、好きになれる作品を選ぶ」が、当日の「プログラムの時間にあわないもの、プログラムの内容、他の人とのかぶりなどで読めない」本は除くという選択もしている。「かぶり」とは絵や内容の重複を指している。

ii) [事前の練習]

「読み聞かせ」の事前準備として下読みを心掛けているという回答が4件あった。個々人で「事前にお話を読み込み」、「必ず何回か練習」して「アクセント、読みの速度、本の持ち方、めくり方など」に留意し「自分のものにしておく」、「あらかじめプログラムが決まっていない場合、3～4冊の絵本すべてに十分な下読みができないことがあるのは、反省点」であると、読み聞かせの実践者としてのプロ意識は極めて高い。

iii) [プログラム]

当日のプログラムに関わる回答が2件あった。「民話、昔話し絵本、あるいは紙芝居」など多彩なジャンルの文化財を取り入れ、「子どもたちが参加できる言葉遊び、手遊びも心掛けて」いる。参加した子どもたちの「興味のきれがないように」プログラムを構成している。

②「読み聞かせ」の実践中

「読み聞かせ」の実践中に関して多くの回答を得た。それらを内容に即して技術面から[表情]、[読み方、話し方]、[本の持ち方、見せ方]、[聞き手(子ども)の反応観察]という小項目に分類し、心理面から[子どもに向き合う姿勢]、[相互の交流]、[読み手が楽しむ]という小項目に分類する。

i) 技術面

[表情]に関わる回答が2件あった。「明るい表情で」「笑顔で」読み聞かせるということを中心掛けている。子どもは誕生から人の顔に注意を払い、1歳頃になると初めて見るものについて安全かどうかを養育者の表情から確認する社会的参照という現象が見られるようになる。乳幼児を主たる対象者にして行われる読み聞かせでは、読み手の表情から安心感を抱かせることは重要

である。この項目は後述の環境づくりにも関係する。

【読み方、話し方】に関わる回答が9件あった。そのうち、読む速度や明瞭さについて触れたものが4件あった。「早口にならない」、「ゆっくりよむ。間を大切に。丁寧によむ」、「ハッキリとイキイキと語る」、「アクセントなども正確に」読むことを心掛けている。声の大きさに関わる回答はなかった。パフォーマンスに触れたものが5件あった。作りすぎて大きにならないようにする、感情を入れすぎないようにするというを異口同音に回答している。その理由として「さらっと読んだほうが、聞き手が想像力を広げられる」、「作者の伝えたい事」を曲げない点を挙げている。聞き手である子どもに解釈を押し付けず、委ねようとする姿勢がうかがわれる。

【本の持ち方、見せ方】に関わる回答として「絵本が子どもの見やすい位置にあるか、向きなどに気をつける（体で隠さないように）」というものがあつた。読み手と子どもとの距離や位置によって子どもから絵本が隠れたり、見づらかったりすることがある。絵本の絵は子どもを想像の世界に誘う。子どもの立場から本の持ち方、見せ方を模索する様子うかがえる。

【聞き手（子ども）の反応観察】に関わる回答が5件あつた。「読み聞かせ」開始の自己紹介では「一人ひとりに声をかけ」、読んでいるときには「一人一人と目線を合わせ」、「ページをめくる時は、子供たちの様子を見る」ようにし、「紙芝居をするときには、できるだけ子どもの顔を見る」ことを心掛けている。乳幼児が対象となることが多いので、乳幼児の「ペースにあわせるよう、柔軟な対応をとるようにしている」。

ii) 心理面

【子どもに向き合う姿勢】に重きを置いた回答が4件あつた。読んでいる間は「必ずしも聞く姿勢を求め」ず、読み終えてからも「感想などを求めない」。読み手と聞き手とが対等の立場であると認識し、読み聞かせを「誠実に行う」ように努めている。子どもは「優れた絵本に出会うと共感しながら目を輝かせて聞き入」るので、その様子から「深い感動を味わっているのがよく分かる」。子どもの力を信じて子どもと「真摯に向き合えばよい」と考えている。

【相互の交流】を重視した回答が3件あつた。「気持ちのキャッチボールがお話を通してできるような」「聞き手との交流を意識」し、「読むことによって子どもたちから教えて」もらい、子どもに喜んでもらうことを大事にしている。

【読み手が楽しむ】という内容の回答が1件あつた。

③ 「読み聞かせ」の実施後

「読み聞かせ」の実施後に関して2件の回答を得た。ボランティアの話が終わると司書が「関係した絵本などを持ってきて紹介」し、「読んだ本が借りられるように展示」というものである。前者はプログラムの途中に挟み込まれることもある。ボランティアと図書館とが連携して読書を推進している様子うかがわれる。

(2) 「読み聞かせ」の環境づくり

「読み聞かせ」の環境づくりに関わる回答が4件あつた。それらを内容によって整理すると【服装】【雰囲気】の2項目になる。

【服装】では読み手として服装に配慮し、具体例として「黒っぽい服を着る」ことを挙げている。服装への配慮は先述の事前準備にも含まれるが、ここに示しておく。子どもの注意を絵本や紙芝居などからそらさず、お話や会の進行にむけるという配慮が見られる。【雰囲気】では子どもが面白

く楽しいと思える雰囲気づくりを目指している。ボランティアの環境づくりの重点は、参加者の心理にある。参加者が安心して楽しく過ごせる環境づくりを心掛けている。

(3) 日頃の心掛け

日頃の心掛けに関わる回答が3件あった。「年3～4回は研修会に参加して勉強し、自身がマンネリ化しないようにしている」というように、研修会を活用して研鑽に励んでいる。「ベストコンディションでのぞめるよう気を付けている」というように、体調管理を怠らない。「子ども時代は短い、優れた本をきちんと手渡すことを忘れない」というように、日常的に読み聞かせで使用する本の選定を行っている。

以上をまとめると次のようである。

ボランティアは読み聞かせの「その場」を成立させるための努力を怠らない。事前の選書を重視し、実践中の聞き手（子ども）の反応を注視して対応を考え、日頃から体調を整え研鑽を積んでいる。そして、図書館と連携して読書を推進しようとしている。読み聞かせの実践者としてのプロ意識が高いことが指摘できる。

(4) 職員の回答との比較

① 「読み聞かせ」の実践にあたって

i) 「読み聞かせ」の事前準備

職員の回答は「事前に何度も読む練習をする」「絵本と絵本のつながり」という2件であった。前者の内容は「事前の練習」に関わる。後者の内容は読み聞かせで使う絵本相互の繋がりを考慮したもので、「選書」「プログラム」のどちらにも関わってくる。ともに「読み聞かせ」の読み手として活動している「岐阜県」の職員の回答である。これらの職員の回答に比べてボランティアの回答は件数の上ではるかに多い。とくに「選書」に関わる回答が多い点は注目される。聞き手に合わせた選書を目指し、年齢や季節などの条件を加味して選定し、さらにプログラムの中で見直している。ボランティアは読み聞かせの場を成立させるために素材選定を重視している。

ii) 「読み聞かせ」の実践中

技術面において職員の回答は「読み方、話し方」、[本の持ち方、見せ方]、[聞き手（子ども）の反応観察]で多く見られた。ボランティアの場合、[本の持ち方、見せ方]は回答が1件と少なかった。ボランティアの回答も「読み方、話し方」、[聞き手（子ども）の反応観察]で多かったが、内容に相違がある。

「読み方、話し方」で職員は声の大きさ、読む速度や明瞭さを挙げたが、ボランティアは声の大きさを挙げなかった。職員はパフォーマンスに触れなかったが、ボランティアはパフォーマンスに触れる回答が5件存在した。ボランティアの回答には聞き手である子どもに解釈を委ね、想像力を育もうとする聞き手主体の姿勢がうかがわれる。

「聞き手（子ども）の反応観察」で職員の視線は一定ではなかった。職員は子どもの反応を見ながら読むが、ストーリー重視の絵本を読むときは画面から目を離さないと回答していた。聞き手との掛け合いの有無によっても視線を変えていた。ボランティアは一人一人の子どもと目を合わせること、子どもの顔を見ることを重視している。

心理面において職員の回答は「読み手が楽しむ」3件であった。ボランティアの回答は3項目

に整理でき、[子どもに向き合う姿勢]、[相互の交流]の2つは職員の回答に存在しなかった。ボランティアは子どもと対等な立場で真摯に向き合い、子どもと双方向に交流することに価値を見出しているようである。

iii) 「読み聞かせ」の実施後

この項目に相当する職員の回答はなかった。しかし、ボランティアの回答からボランティアと図書館とが連携して読書を推進している様子がうかがわれる。

② 「読み聞かせ」の環境づくり

職員の回答は「場の空気感」づくり、「穏やかでゆったりとした雰囲気」づくり、「読み聞かせがしやすい環境」への配慮というものであった。各図書館が設けている読み聞かせスペースの雰囲気を読み手と聞き手が共有し、保持できるような穏やかで静かな環境づくりに配慮していた。読み聞かせスペースをどのように整えて提供するかということに重点があった。これに対して、ボランティアの環境づくりは、参加者がいかに安心して楽しく過ごせるかという参加者の心理面に重点がある。

③ 日頃の心掛け

この項目に相当する職員の回答はなかった。ボランティアの回答から「読み聞かせ」の直前や当日だけではなく、日常的に研鑽に励み、体調を維持し、選書を行っているという意識の高さが見て取れる。

④ 子育て支援としての図書館

「読み聞かせ」で心掛けていることとして、「大垣市」は子育て支援としての図書館の在り様に言及していた。お母さんを応援する図書館、子ども理解の機会を提供する図書館、家庭とは異なる新たな世界を知るきっかけを提供する図書館という姿勢が示されていた。この項目に関して、ボランティアの回答には触れるものがなかった。

ボランティアと職員の回答を対照させると、ボランティアが読み聞かせの場をいかに成立させるかに重点を置いているのに対し、職員が図書館の数ある役割の一つとして読み聞かせを捉え重視している様子が見えてくる。職員が図書館の在り様に子育て支援を挙げているのは、その例である。

2. 読み聞かせ活動の意義

「読み聞かせ活動の意義は何だと思いますか」と尋ねた結果を述べる。読み聞かせ活動の意義について、今回、回答いただいた内容を整理すると、次の5つの項目に分類された。最後に、(6)として職員との回答との比較を行う。

- (1) 子どもと本をつなぐ
- (2) 絵本ならではの世界を届ける
- (3) 集団の中で、直接他人の声を聞く体験の大切さ
- (4) 楽しい時間を親子で共有してもらうこと
- (5) 読み手自身の伝える喜び、学ぶ喜び

(1) 子どもと本をつなぐ

①多くの本と出会い、感性を育む

「子どもと本をつなぐ」については、多くの本と出会い、子どもたちの感性を育むことが重視されており、「子どもと本をつなぐこと」、「多くの本に出会い、感性を育てることだと思う」、「本好きになる」という回答が見られ、「本に興味をもち親しみをもってもらう。又、こどもたちと接して私たちもいろいろ教えられ学ぶことがあります。そういう機会をもち続けてくれたこと」という回答にあるように、読み聞かせ活動を継続的に行う大きなモチベーションともなっている。また、「自分だけでは出会えない本もある。0歳から年齢を問わず続けるべき活動だと思う」という回答に見られるように、子どもに本を読み聞かせ、すすんで子どもと本との出会いの仲立ちをする役割の意義が語られている。

②絵本を身近なものに

絵本との親近感を育み、本を身近なものにしたいという強い思いは、「書物を身近な物に感じてもらうこと」、「『絵本』も他の『おもちゃ』と同じ様に、手軽に利用できるための一手段。そんな親近感への入り口」という回答にも表れている。

③ゲームやアニメとは違うもの

この背景には、絵本や絵本の読み聞かせには、ゲームとは違った心の受け止め方があるという認識が働いており、「絵本を通してゲーム等とは違った心の受け止め方を学び、成長して欲しい」、「動画のように多くの絵があるわけではないので、想像力がつく」という回答に示されている。ゲームやアニメとは異なる、絵本ならではの世界を子どもたちに届けたいという強い思いが働いているといえる。

(2) 絵本ならではの世界を届ける

①本は楽しいと伝えたい

こうした絵本ならではの世界とは、「子どもが本の中には楽しくて豊かな世界が広がっていると認識できる」楽しく豊かな世界であり、「『本も楽しいのだよ』というメッセージを伝えたい」、「その子がいつか本の楽しさを知ってくれたらうれしいと思います」と、絵本や本の世界の楽しさを伝えたい、届けたいという思いの強さが述べられている。ボランティアの一人は、次のように率直に語っている。「よい本との出会いの提供。子どもたちにやさしい、美しい、すてきな世界があることを紹介することが、子どもたちが大きくなったとき、何かのお役に立つのではと思う」。

絵本やその読み聞かせを通して豊かな想像力を育てていきたいという強い願いは、また次のような回答にもはっきり聞き取ることができる。「読み聞かせの中で新しい旅ができ、新しいことも学べることもある」。「幼い頃より良い絵本に出会うことで文学の楽しさに目覚め、一生の伴侶として本を傍において欲しいと思います。本に親しむことで主人公とともに様々な経験をし、豊かな想像力を育むことができます。これからの長い人生でそれはとても役立つと思います」。

②新しい旅ができ、豊かな想像力を育む

この他に、「音と絵が同時に感じられること」、「言葉より絵本(?)を通していろんな事を伝えていきたい」といった、絵本の絵とことばとの関係、絵本の持つ「絵」の意味について触れた回答

がある。このことは、あらためて、絵本ならではの特徴である「絵」のもつ意味・役割、絵とことばとの関係性についての重要な示唆を与えている。たとえば、ある回答者は、絵を見て自分で話を作る子どももいることを次のように指摘している。「絵本も読みたいと思うようになり、小さいお子様（3歳以上）方も絵を見て自分で話を作るお子様もいらっしゃるようになる」。

（3）集団の中で、直接他人の声を聞く体験の大切さ

①聞く力をつける

「聞き方も上手になる」、「子どもたちは、大人の話を書く経験を通して、人の話に耳をかたむけ、自分の気持ちを相手につたえようとします」と、読み聞かせが、子どもの「聞く耳」、聞く力を育み、気持ちを伝える力を身に着ける意義が強調されている。

②直接声のトーンを感じる

こうしたことは、読み聞かせ活動が、なによりも目の前にいる人からの直接の声のトーンも感じてもらい「集団の中で、直接他人の声を聞く体験」だからである。回答者は次のように述べている。「画面の中からの刺激ばかりでなく、目の前にいる人からの直接の声のトーンも感じてもらうこと」、「そこに絵を読む子どもたちの力がかさなることで、言葉の獲得につながり、大人の声をきいて安心してこちよい時を過ごすことが出来る、幸せな時をすごしてくれることが育ちのなかでは大切だと思います」、「読んでもらうことは耳から言葉が入り、目で絵や文字を追うことでお話気持ち豊かになる」。

読み聞かせ活動は、参加する子どもたちにとって、集団の中で展開する言語活動であり、「集団の中で、見たり聞いたり刺激を得られるのは大切である」。

また、「家庭でふつうにおこなわれるのがよいと思うが、他人の読むのをきくのも、読書の入り口になるのではないかと思う」というように、「他人の読むのを聞くのも、読書の入り口になる」という思いが見られる。

（4）楽しい時間を親子で共有してもらうこと

①ストレス発散、出会いの場として

子どものみならず、子どもを連れて図書館の読み聞かせにくる保護者に対しての配慮も非常に重視されている。

まずは、「お母さんのストレス発散、他のお母さんとの出会いの場」であり、外に出て他人と触れ合い、とても喜んでいる。「お母さんは、外に出たいストレスを抱えているため、外に出て人と触れ合う場にもなっている」、「他の子どもが反応してママが嬉しそうにしているのを見ると、『私の子も見て』という様子になる」。

②母と子のコミュニケーションの場、親同士、子ども同士のコミュニケーションの場

お母さんと子どものコミュニケーションの場、お母さん同士、子ども同士のコミュニケーションの場となることを大きな目的・意義と感じ、また、そうした親の要望に積極的に答えようとしている姿勢が見られる。「お母さんと子どものコミュニケーションの場になるし、お母さん同士、子ども同士のコミュニケーションの場だと思う。最初は5組程度だったのが、10組になり、15組になり、どんどん増えていくのを見ると、お母さんたちは、触れ合う場を求めているのだと思う」。「心豊か

でかつ柔軟な精神を育む一助となるのでは。親子のスキンシップ」、「本という材料を使つての親子のコミュニケーションを深めていくことの大切さを感じてもらえると嬉しい」。

③子どもとの新たな触れ合い、発見の場

読み聞かせを通して「子どもとの新たな触れ合い、発見の場」となつてほしいという思いも強い。次のような回答は、それを如実に物語っている。「絵本や手遊びにじっと注目する子どもを見て、『子どもはこんな反応をするんだ』とお母さんがびっくりするきっかけづくりになっている」。「子どもは、どんなに小さくても、0歳児でもじっと絵本を見る。その様子を見て、お母さんがびっくりする。我が子が楽しそうにする様子を見て、ママが嬉しそうにしている姿がある」。

さらに、お母さんの楽しむ様子は確実に子どもに伝わっている。「お母さん達大人がおはなしを楽しんでいる様子が子ども達にも伝わっていると感じます」。

母親たちの地域でのつながりと参加の仕方については、次のようないくつかの参加の形態があるとの回答もあった。「最近のお母さんは親しい人と小集団のグループを作つて行動する傾向がみられる。仲のいいグループでやってきて、一緒に活動する。また、一人でやってきて、親子での時間を楽しみ、帰宅される方もいる。人とのつながりを求める一方で、親しい人以外とは関わろうとしない姿もある。そういったお母さん達には、自由に来て遊んで帰ることができる場が求められているのだろう」。

(5) 読み手自身の伝える喜び、学ぶ喜び

①読み手の体験を伝える

図書館における読み聞かせボランティアのモチベーションの基盤には、子どもの喜ぶ姿、「子どもの笑顔」だけでなく、「読み手自身(ボランティア)の伝える喜び・学ぶ喜び」がある。ボランティアの一人ひとりが人生の中で味わい、体験してきたこと、つまり「いろんな年齢の読み手が、体験したり背負っていることを本を通して伝えていていること」が、ボランティアの活動を支えており、「低学年や幼児には、読む人の愛を届けるとてもよい手段だと思う」というように、「読む人の愛を届ける」活動という回答も見られた。

②同じ時間、同じ場所で読み続ける意味

「読み続けることに(同じ時間、同じ場所)意味があると思います」と答え、同じ時間、同じ場所で読み続けていくことの大切さ、その意義に触れている回答も見られた。さらに、保護者への啓蒙的な活動の意義としても考えられている(「親御さんに選本の一例とか読み方の一例を提示することで参考にしてもらう」)。

③読み手自身の学ぶ喜び、自分育て、自己実現

しかし、ボランティア活動を支える重要なモチベーションとして、次のような回答に見られる「読み手自身の学ぶ喜び」や「自分育て」の側面も、いわゆる自己実現を求めた回答も逸することはできない。「(読み聞かせ)活動をとおして、自分が学ぶ喜びを感じています」、「親子の楽しい時間作り。親子で一層お話に興味をもってもらい、おうちでの読み聞かせの糧になれば嬉しいです。読み手にとって、自分育てとなっています」。

ボランティアにとって読み聞かせ活動の意義とは、読み聞かせを通して、楽しく充実したひと時を親子で分かち合い、絵本ならではの豊かな世界を子どもたちに送り届けることである。また、絵本の世界や自らの体験を語り伝え、自分を磨きながら自分を育てていくことにボランティアとしての積極的な意味を見出している。

(6) 職員の回答との比較

読み聞かせ活動の意義について、職員は、本と子どもを結ぶこと、肉声で言葉が身体に届くこと、絵本を介した親子のつながり、お母さんの居場所づくりといった子育て支援の役割などに意義を置いており、こうした点では、ボランティアとの違いはほとんどない。しかしながら、職員は、子どもの言語能力・思考力を育むといった教育的な視点や、図書館の利用者サービスの在り方への配慮がはっきりと見られ、こうした点は、やはり職員の職業的な立場と密接に結びついている。

一方、これに対して、ボランティアに携わるモチベーションの背景には、絵本の世界、その魅力を子どもに伝えるだけでなく、自らの体験したことを表現していく自己創造活動、自ら学び、自らを高めていく自己実現への志向が強く働いている点が顕著にあらわれている。

この点に関して、見方を変えれば、図書館における読み聞かせ活動とは、職員がとる「公」としての立場と、表現し、演じることに重きを置くボランティアの「個」としての立場との違い、すなわち「公」と「個」の立場上の相違、その微妙なバランスの上で行われている活動と考えることができる。

また、一部のボランティアの中には、現代の学校教育に対する批判意識や現在子育てする若い母親たちへの積極的な啓蒙意識を表明する回答もあり、このことは、職員の回答にはまったく見られなかった。

読み聞かせ活動の意義について、図書館の職員は、本と子どもを結ぶこと、肉声で言葉が身体に届くこと、絵本を介した親子のつながり、お母さんの居場所づくりといった子育て支援のための役割に意義を見出しており、ほとんどの点で、ボランティアとの違いはないが、子どもの言語能力・思考力を育むといった教育的な視点や図書館の利用者サービスの在り方への配慮がはっきりとあらわれている。一方、ボランティアの場合は、読み聞かせ活動を通して、自らの体験を伝え、自ら学び、自らを高めていく自己実現への志向が見られる。

3. 読み手が捉える参加者の変化とそれに伴う活動の変化

「読み聞かせ活動を続けてきて、子どもの様子や活動の内容に変化はありますか。それは、どのようなことですか」と尋ねた結果を述べる。各図書館のボランティアから得られた回答を内容に即して、(1) 子どもの姿の変化、(2) 参加者数・年齢層の変化と活動の変化、(3) 分からないの3つの項目に整理して分析した後、(4) 職員の回答との比較を行う。

(1) 子どもの姿の変化

子どもの姿の変化に関する回答は、8件あった。その内5件は、読み手として本を介したやりとりを重ねる中で感じられる子どもの育ちであった。「なかなか集中して聞けなかった子たちが、1年もすると長い絵本でも聞けるようになったり、めざましい成長を見せてくれる」ことに喜びや驚きを感じたり、「聴く力は、聴き入る姿勢は、ついてきている」と子どもの集中力の高まりを実感していることがうかがえた。さらに、「やり取りの中に信頼が生まれます」という回答が見られた。

前述した通り、ボランティアが心掛けていることの1つに「気持ちのキャッチボールがお話を通してできるような」「聞き手との交流」がある。一方的に読むのではなく、「子どもと真摯に向き合う姿勢」を心掛けて活動しているため、読み手である自分と聞き手の子どもとの関係性の変化も意識されるのだと考えられる。

また、変化しない点として、「子どもはお話が好き」という回答があった(3件)。「おはなし会に来てくれる子たちは、本当に本が好きな子たちだと思う」と述べ、子どもの絵本を見るまなざしから、子どもが絵本に興味を持ち、読み聞かせの時間を楽しんでいると捉えていることが推察される。

(2) 参加者数・年齢層の変化と活動の変化

参加者数や年齢層の変化に関わる回答は、24件あった。「図書館での読み聞かせは集まる人数も日によって異なります」という回答があるように、幼稚園や保育所等での読み聞かせとは異なり、公共図書館での読み聞かせの参加者は毎回同じではない。当日になって初めて参加者の年齢層や人数が分かることがほとんどであるが、長年読み手となっているボランティアは、全体的に参加者が「年々少なくなった」と捉えていた(3件)。

ボランティアが、変化として特に注目していたのは「来てくれるこどもの年齢が変わってきた」ことである(12件)。「小学生があまり図書館に来てきこうとする姿がない」状況と「対象が幼くなってきて」、「0歳児の参加が増えてきている」状況が指摘されていた。読み聞かせ活動は、以前は小学生が中心に参加していた。しかし、「ブックスタート」をはじめ乳児からの絵本との出会いを促す取り組みが自治体で実施されるようになり、「岐阜県」・「大垣市」・「羽島市」では乳児を対象としたおはなし会が開催されるようになった。そのため、0歳児から参加する姿が見られるようになり、乳幼児期の参加が増えてきている状況がある。その変化に伴い、1件ではあるが、「絵本も低年齢の子ども向け、絵のはっきりしてきれいなものに少しずつ変えていった」という選書の変化を述べるボランティアもいた。

また、「継続して参加してきてくれる子は少ない」点にも言及されている。以前は「顔なじみの子もいた」とし、「常連さんがいない」と述べる回答もあった(3件)。「子どもの姿の変化」で述べた通り、ボランティアは、継続的な参加によって子どもの姿に変化が生じること、関係性を築くことによって、読み聞かせで得られる体験が変わることを認識している。そのため、継続しておはなしに触れて欲しいとの願いを持っているのだろう。乳幼児期に参加した子どもが、学童期以降に参加する姿が見られない状況を「残念」と述べる回答も見られた。

そして、このような参加者の低年齢化と継続した参加の減少の背景には、保護者の意識や行動の変化があると捉えていることも見えてきた(6件)。参加する子どもの低年齢化に伴い「親さんの参加が増え」ていること、「お父さんの参加の広がり近頃顕著」と述べている。さらに、読み聞かせ参加時の保護者の姿勢と行動に着目し、「みんなでのお話を楽しむ時間として親さんも素直にお話に反応」している様子や「親の事情があり、30分滞在できない子も多い」という姿にも注目している。「『読み聞かせは幼児のもの』というイメージができてしまっている」という回答もあり、参加する子どもの様子を通して保護者の生活状況や読み聞かせに対する認識の変化を捉えていることが分かる。

(3) 分からない

変化について「分からない」という回答は、4件あった。回答の理由は、経験の短さと「その日、その時の親御さんとの出会いなので、変化としてはとらえにくい」であった。

以上のように、ボランティアは、全体的な参加者が減る中、乳幼児の親子の参加が増加している変化を客観的に捉えている。さらに、継続して参加することで生じる子どもの育ちや関係性の深まりなど、参加者とのやりとりの中で感じる質的な変化を認識していた。

(4) 職員の回答との比較

変化に関する職員の回答とボランティアの回答の共通点としては、①「子どもは絵本が好きであり、その姿は変わらない」と捉えていることと、②乳幼児の参加が増加する一方で、小学生以上の参加が減っており、参加者層が低年齢化していること、③父親と一緒に参加する姿が増えたこと、④変化が分からないと答えている人がいること、が挙げられる。なかでも、両者とも「乳幼児期の親子での参加の増加」と「小学生以上の参加者の減少」に注目した回答が多い点は共通していた。それは、参加者の属性によって読み聞かせへの反応や場の雰囲気、参加者が期待すること、読み手と聞き手の関係性が変わってくるからであろう。

だが、その変化に対する両者の受け止め方は同じではない。職員の回答には、乳児期の子どもの増加に伴い、活動内容や開催方法を変えていることを示すものが7件あった。運営を担う職員は、子どもの生活環境の変化や保護者支援の必要性に目を向け、子育て支援の一環としての「読み聞かせ」を充実させようと、意図的に活動内容を変化させていることが回答に反映されていた。実際に読み聞かせ活動を見ると、従来から行われている絵本の読み聞かせに加え、パネルシアターやエプロンシアター、わらべうたや手遊び、製作活動などが取り入れられ、多様な親子の興味関心に添えるよう、活動の内容が広がってきている。しかし、ボランティアの回答には、活動内容や読み手側の変化に触れた内容が1件しか見られない。それは、活動内容が広がっても、意義の1つに挙げていた「絵本ならではの世界を届けたい」という思いを変えず持ち続けているからかもしれない。職員の回答にはなかった参加者との関係性や子どもの育ちを変化として挙げるボランティアもあり、子どもと絵本、読み手の関係性の深まりを重視して活動していることがうかがえる。

このように、職員もボランティアも「参加者層の変化」を捉えているが、その変化の受け止め方に違いが見られたといえよう。子育て支援としての役割を意識する職員と、子どもとともに絵本の世界を楽しむことを重視するボランティアの姿勢の違いが、変化について語る回答に反映されたと考えられる。

4. 今後の課題

「読み聞かせの活動の、今後の課題は何だと思いますか」という質問に対し、各図書館のボランティアから回答を得た。内容を整理すると、(1)「読み聞かせ」の場及び参加者の減少、(2)ボランティアとしての質の向上、(3)継続することと仲間作り、情報交換・情報提供・研修の場、(4)子育て及び読書への支援の場としての4つの項目に分類することができた。これらについて述べた後、(5) 職員の回答との比較を行う。

(1) 「読み聞かせ」の場及び参加者の減少

読み聞かせへの参加者数を懸念する意見が9件あった。

「図書館のおはなし会」における「おはなし会の参加者を増やすこと」、「もっと多くの子供たちに参加してもらうこと」、「読み聞かせの場は、一時期多くなったが、現在はどんどん少なくなってきた。その今だからこそ、こういった言葉を伝えあう活動は重要だと伝えていきたい」と回答し、読み聞かせに参加する子どもの数の減少を課題と指摘する。

このような現象の背景を「子供の興味をひく娯楽が多く、絵本の読み聞かせという、ある種地味な活動への参加が少ない」のだと分析するボランティアもいた。また、「ただ絵本を読んでいるだけでは、コーナーの子どもは増えません」「今はメディア社会で刺激が強い中、絵本のような動きのないお話の提供はとても難しいと思っているので、どう切り込んでゆくかが課題」だと捉える方もいて、子どもたちの興味をひく娯楽に優る「読み聞かせ」の魅力を打ち出す必要があると捉えている。ただ本を読むだけでなく、興味をひく切り口を求めている。

このような思いを背景にして、「もっと様々な場所で気楽にお話を楽しめる場（たとえば、戸外でのおはなし会など）が増えるといい」、「低学年の子の多くが、学童などで過ごしている時間が多いため、そこへ行って読み聞かせをしたら、もっと多くの子に聞いてもらえる」、「少子高齢化の社会に向けて、大人に向けての読み聞かせや中高生に向けての昔話を語るといった機会がもっと作ることができる」といという回答があり、読み聞かせを活性化するために「場」を広げることが挙げられている。戸外での「読み聞かせ」や大人に向けての「読み聞かせ」や中高生に向けてのストーリーテリングを設け、広げていこうと提案する意見もあるのだが、「ボランティアなら何でもOKの弊害があちらこちらで出てきているようです」、「子どもにあうプログラムでなく、自分の読みたい本優先」、「受けねらいの選書」「読み聞かせのイベント化など」という弊害を指摘するボランティアもいた。子どもを疎かにしてはいけないという意識の強い警鐘である。あくまでも読み聞かせは今を育つ子どもが主体だという捉え方を見ることができる。

このほか、日時・内容の「活動情報の周知」をする、のように広報によって参加者の増加を図ろうという回答が1件あった。

(2) ボランティアとしての質の向上

ボランティア自身についての質の向上を課題とする意見が9件あった。このうち、選書眼をみがくことを課題とする回答が4件あった。ボランティアが「読みたい本と子どもが好む本とにずれがあるので、大人と子どもの感性の違いを考えて選書する必要がある」というのは、対象者に合わせた選書の視点であるが、「近年出版されている本が読み聞かせにはどうか？選書がむずかしくなりました。うけを狙ったものがよい物のようなところや古典は古いからうけないというのを聞きますが、子どもにもっていったってそんな事はありませんし、うけ狙いのものが続けばあきている子もいます。選書の力をつける事が大事だと思います」というのは、対象者に合わせてばかりではいけないという逆の意見である。これらのほか「本に興味のない子や、あまりふれていない子にいろんなジャンルのものにふれさせ」、子どもたちに「よいものをえらぶ目をやしなってもらいたい」という意見は、読書につながる選書の視点である。いずれにしても何を提供するかを第一義の課題と捉えていることが分かる。

（回答の中に「対象年齢へのおすすめの本の情報に乏しい」、「図書館に欲しい本がない」という意見があった。これは図書館への要望であろうが、選書に関わってくるのでここに記しておく。）

その他の技術、例えばどのように読むかという点については、「読み聞かせをする側の『私づくり』

(読むこと、読む姿勢、活字と常に接すること)」が1件あったのみで、「ボランティアの質の向上」、「読み聞かせ会員の知識と技術の向上」、「各自の読み聞かせのレベルアップ」のように、具体的に挙げるのではなく、広く質の向上として回答されていた。この他、「私達も勉強して、固定概念を捨て、今、何をすべきかを考えていく必要があると思います」というのもあった。自分自身が変わっていくことを課題としているわけで、より良い読み手としての向上心をうかがい知ることができる。

(3) 継続することと仲間作り、情報交換・情報提供・研修の場

(2)のように個人の力が向上すればそれで良いのかということそうではない。「読み聞かせ」活動はひとりで行うのではなく、4～6名がグループになって実施されている。このため仲間との関係作りが問題になってくる。

活動を「継続すること」、「活動を続ける仲間作り」という回答や「若い人たちの参加がむずかしいです。(養成講座などで少しずつふえてはいますが、年齢は高いです)」、「若手の方々が、読み聞かせの活動に興味を持ち、自分の子だけでなくたくさんの子に本と仲良くなってもらえるように、思っただけのような働きかけが必要だと思う」という回答から、活動を継続するむずかしさとボランティアの高齢化を読み取ることができる。活動が受け継がれていく仲間作りの重要性を感じ、若いボランティアを求めている。しかしながら、「読み手も、若い世代の人に参加して欲しいが、若い人は働いていてできない状況」があり、困難さを指摘している。

ボランティアの姿勢という視点で、ボランティアの中には、「自己実現を優先される方もみえるようです。私達ボランティアも子ども達に楽しい今が未来につながる活動になるよう、今一度基本に立ち帰らねばならないようです」という意見があった。「読み聞かせ」ボランティアの意義に係る課題の指摘である。これを良しとしないのには仲間意識が背景にあると推察されるが、ボランティアは個人の志によるのでこのような場合もあるのかもしれない。

以上の他に、「読み聞かせグループ間の情報交換の場が少ない」という意見があり、円滑で充実した活動を続けていくための課題として、情報交換や情報提供の必要性を挙げている。また、「図書館は『社会教育』、「学校・幼児教育機関は『教育』という立場であること、さらに広く子ども達を育む立場で読み聞かせを行う責任があると思います。①基本となる本の大切さと定番の本の周知、②読み聞かせの意義を正しく伝える、③昔話の大切さと定番の本の周知、特にこの3点を保育者や教員育成機関(大学・専門学校など)において教育プログラムに入れていただきたい。司書資格教育機関においてもプログラムに入れていただきたい(学校司書養成プログラムには入っているかもしれませんが)、ボランティアと協働する図書館は、研修を行い、責任を持ってボランティアのステップアップを図っていただきたい」のような要望があった。

(4) 子育て及び読書への支援の場として

「読み聞かせ」を①家庭・地域の子育て支援として捉えた提案や②自分で読む読書への支援として捉えた意見があった。

①家庭・地域の子育て支援として

「家庭での読み聞かせの必要性」という回答があり、家庭での読み聞かせが重要で、自分たち、ボランティアの活動はその支援だと位置づけていることが分かる。また、子どもとの関わりが深い母親との関係で読み聞かせを意識した意見が3件あった。それは、「地域として、癒しの場を増やしたい。3歳まではお母さんと一緒にいて欲しいと願っている。愛着形成がなされる時期であるた

め、この時期は取り返しがつかない。お母さんよりも保育士との愛着形成が深い子もいる現状がある。1, 2歳の時もお母さんが子どもと過ごし、育てられるような社会の仕組み、制度ができることが必要だと思う、「複数のお子さんと来ているお母さんへのフォロー」、「若いお母さんたちの本の選定が流行に流されていたり、内容が子どもに伝わりづらいのではないかと思うことがよくあります。保護者の方々も絵本について勉強する機会があるとよいと思います」という回答であった。これらに共通する思いは、母親への支援である。「読み聞かせ」を社会の仕組み或いは制度と紐付けて、地域の癒やしの場と位置づけることを提案している。

②自分で読む読書への支援として

この項目に関しては、「読書記録（ノート）手帳があると、お子様も『こんなに読んだ』とか『こんな本を読んだ』等々の足跡が残っていて楽しいのではないかと思っています。やりたい人、やってみたい人だけでもいいのでは…」、「絵本の『読み聞かせ』と『自分で読んで楽しむ』間には案外大きなハードルがある。絵本の読み聞かせ以降の耳からの読書（本の読み聞かせストーリーテリング）を大切にしたい」などがあつた。「読み聞かせ」を読書教育に関わらせて捉えている。読み手という活動に使命感を抱いている点を見て取ることができる。活動を大局的に観取した「読み聞かせ」と読書活動の連携に対する課題である。

以上、図書館における「読み聞かせ」を担うボランティアが捉える「今後の課題」を整理分析してきた。ボランティアは、志を持った市民の一人という立場である。「読み聞かせ」を担うという使命感を背景に、読み手としての質の向上や情報交換の必要性など個人的なことをはじめ、活動の活性化、さらに、地域社会や制度に関わることにまで、幅広く多角的に課題を捉えていることが分かった。

（5）職員の回答との比較

今後の課題について、職員の捉え方とボランティアの方の捉え方を比較する。

職員の回答とボランティアの回答を、①読み聞かせを子育て支援や読書推進の場として捉えていること、②読み聞かせ活動の活性化、③ボランティアの高齢化と読み手としての資質の向上、④情報交換、ボランティアとの連携の4つを視点に述べる。

①読み聞かせを子育て支援や読書推進の場として捉えていること

両者ともに、この項目を課題として挙げていたが、職員は読み聞かせに参加のない保護者に対して絵本の楽しみを啓発するという興味関心の啓発をどのように設定していくかに重点が置かれていた。これに対し、ボランティアは読み聞かせを親子の癒やしの場と捉え、地域社会の仕組みに紐付ける必要性を提案した。ここに両者の違いとして、職員は運営者としてかかわる、ボランティアは実践者としてかかわるという立場の違いを見て取ることができる。

読書推進においては、絵本から読み物（本）へ導いていくという流れを職員もボランティアも意識しており、共通認識していた。

②読み聞かせ活動の活性化

この項目も両者ともに指摘し、参加者を増やす必要性を挙げていた。職員は広報などPRのより

良い方法を課題とし、対策を立てる必要を述べていたが、ボランティアは参加者の減少を危惧し、参加者の興味関心に寄り添った読み聞かせの選書や場の設定を提案していた。ここで注目したいのは、ボランティアが体験的に参加者の減少を受け止め、実践者としての具体的な場の設定を提案していた点である。職員の中にも読み手を担当する者がいたが、ボランティアのような受け止め方をしている回答はなかった。職員は、読み聞かせの場の提供や読み聞かせを広めるための広報の充実に力を注ごうとしていた。ここにおいても、①と同じような立場の違いを両者に見ることができる。

③ボランティアの高齢化と読み手としての資質の向上

高齢化を課題とする点は両者ともに大きな課題とする点で共通していた。「質の向上」という言葉に着目すると、職員の回答に、「おはなし会の質の向上」というのがあった。この場合は読み聞かせ活動全体の質の向上を指しており、読み手個人の質の向上という意味ではない。読み手の質、言い換えれば、読み手の資質の向上についての回答は、ボランティアからのみであった。前述したが、ボランティアが読み聞かせ活動に携わるモチベーションの背景には、絵本の世界の魅力を子どもに伝えるだけでなく、自らの体験したことを表現していく自己創造活動、自ら学び、自らを高めていく自己実現への志向が強く働いていた。したがって、ボランティアが個人の資質の向上を課題とすることは当然のことと考えられる。

④情報交換、ボランティアとの連携

情報交換もボランティアとの連携も協働に関わることで、コミュニケーションを取り、意思疎通を図るという課題である。それを、ボランティアにおいてはボランティアとボランティアとの間のこととして捉えていたが、職員においては図書館側とボランティアとの間のこととして捉えていた。この点で違いがあり、注目される。職員からは、ボランティアとの連携を取り、より良い運営に繋がりたいとの意向もっている。一方、ボランティアはそのことよりも、自分の活動がより円滑にいくことや活動を続ける仲間作りのほうを重視している。ここに差を見ることができる。

以上、今後の課題について、職員の捉え方とボランティアの捉え方を比較してきたが、両者の差の背景には、職員のサービスを提供する立場、ボランティアの自己実現への志向の立場という違いがあるといえる。

IV. おわりに

以上、4図書館で「読み聞かせ」に携わるボランティアのインタビュー調査をもとに、ボランティアの意識をまとめてきた。以下、明らかになった点を示しておく。

- ボランティアは読み聞かせの「その場」を成立させるための努力を怠らない。事前の選書を重視し、実践中の聞き手（子ども）の反応を注視して対応を考え、日頃から体調を整え研鑽を積んでいる。そして、図書館と連携して読書を推進しようとしている。読み聞かせの実践者としてのプロ意識が高いことが指摘できる。
- ボランティアにとって読み聞かせ活動の意義とは、読み聞かせを通して、楽しく充実したひと時を親子で分かち合い、絵本ならではの豊かな世界を子どもたちに送り届けることである。また、絵本の世界や自らの体験を語り伝え、自分を磨きながら自分を育てていくことにボランティアとしての積極的な意味を見出している。

- 乳幼児の親子の参加が増え、参加する子どもが低年齢化していることと、全体的な参加者数が減少していることを変化として捉えている。継続して活動する中で、子どもとの信頼関係を実感し、「集中力」や「聞く力」の育ちを見とるとともに、参加が継続しないことでその育ちが感じられにくいことを憂慮する回答もあった。
- ボランティアは、志を持った市民の一人という立場である。「読み聞かせ」を担うという使命感を背景に、読み手としての資質の向上や情報交換の必要性など個人的なことから、読み聞かせ活動の活性化、さらに、地域社会や制度に関わることにまで、幅広く多角的に課題を捉えていた。

次に、先に報告した図書館における「読み聞かせ」を担う職員の意識と今回のボランティアの意識との比較から明らかになった点を示しておく。

- 心掛けていることにおいては、ボランティアが読み聞かせの場をいかに成立させるかに重点を置いているのに対し、職員が図書館の数ある役割の一つとして読み聞かせを捉え重視している様子が見えてくる。
- 読み聞かせ活動の意義について、図書館の職員は、子どもの言語能力・思考力を育むといった教育的な視点や図書館の利用者サービスの在り方への配慮がはっきりとあらわれている。一方、ボランティアの場合は、読み聞かせ活動を通して、自らの体験を伝え、自ら学び、自らを高めていく自己実現への志向が見られる。
- ボランティアの回答には、職員が意識的に変化させようとしていた「活動内容の多様化」に関する変化はほとんど挙げられなかった。読み手としての立場から「聞き手との関係性」に目を向け、参加する子どもの育ちを変化として挙げていた。
- 職員とボランティア、両者には立場の違いがある。職員は、読み聞かせという場を提供する運営者（行政者）、いわば「公」の立場であり、ボランティアは、与えられた読み聞かせの場の実践者、市民の一人である「個」の立場である。これを背景として、職員もボランティアも挙げていた共通した課題であっても、捉え方や重視する点などに差が見られた。

今後、さらに教育機関・教育施設における幼児に対する絵本の読み聞かせについて調査し、就学前の幼児の言葉の育ちと読み聞かせとのかかわりを探求する予定である。

謝辞

これまで、「公共図書館における『読み聞かせ』に参加する乳幼児と保護者の実態」（岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要 第20号 令和3年2月刊）において、読み聞かせに参加する保護者の実態をまとめ、「公共図書館における『読み聞かせ』を担う職員の意識」（「岐阜聖徳学園大学国語国文学」第40号 岐阜聖徳学園大学国語国文学会 令和3年3月刊）において、読み聞かせに携わる職員の意識をまとめてきた。そして、本稿において、読み聞かせに携わるボランティアの意識をまとめた。

調査にご協力くださった図書館職員の皆さま、読み手としてご活躍されているボランティアの皆さま、「読み聞かせ」に参加された皆さま、子どもたちに心より感謝申し上げる次第である。

注

- 1) 文部科学省「子どもの読書活動の推進に関する法律」(平成 13 年法律第 154 号)
- 2) 文部科学省「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画(第四次)」(平成 30 年 4 月)
- 3) 水谷亜由美・中村哲也・濱千代いづみ・藤田万喜子(2021)「公共図書館における『読み聞かせ』に参加する乳幼児と保護者の実態」岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要、第 20 号、pp.145-154.
- 4) 水谷亜由美・中村哲也・濱千代いづみ・藤田万喜子(2021)「公共図書館における『読み聞かせ』を担う職員の意識」岐阜聖徳学園大学国語国文学、40、pp.39-54.
- 5) 宮澤優弥(2017)「読み手は学校における読み聞かせ活動をどう意義づけているか」読書科学、58(4)、pp.212-226.
- 6) 当初の予定では、調査協力者に口頭で質問し調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から書面での調査を併用して行った。
- 7) 前掲 4)